様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　５ 年　６ 月 １６ 日現在

機関番号：３４４２６
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2020～2022
課題番号：２０Ｈ０１５９０

研究課題名（和文）薬害の社会的過程の分析――Biological Citizenshipの観点から

研究課題名（英文）Analysis of the Social Process of Drug Induced Sufferings: From the View Point of Biological Citizenship

研究代表者
本郷　正武（Hongo, Masatake）

桃山学院大学・社会学部・准教授

研究者番号：４０４５１４９７

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,700,000円

研究成果の概要（和文）：なぜ「薬害」概念は海外に存在しないのか。薬害概念のその特質を、全国薬害被害者団体連絡協議会の結成（1999年）の経緯から、薬害エイズ以降、薬害概念が普及し、拡張していくプロセスを示した。さらに、公害問題から薬害スモンへ、さらに後続の薬害問題へと弁護士のつながりや現代型訴訟による訴訟戦術の継承を明らかにした。これらの研究成果は『薬害とはなにか――新しい薬害の社会学』（ミネルヴァ書房）のかたちで結実させることができた。

研究成果の学術的意義や社会的意義
薬害概念が日本固有のものであるのは、薬害エイズ以降の薬害概念の普及と拡張による薬害被害者の連帯、および公害問題からの問題意識の接続という被害者運動の文脈があるためである。コロナ禍による制約により、同種の被害者概念にあたると考えられるBiological Citizenship（生物学的市民）との対比が十分におこなえなかったことから、今後のさらなる課題として次期研究プロジェクトに引き継がれることとなった。

研究成果の概要（英文）：Why does the concept of "Drug-Induced Sufferings(DISs)" not exist overseas? The characteristics of the concept of DISs were shown from the background of the formation of the National Liaison Council of DISs Victims' Organizations (1999), and the process by which the concept of DISs spread and expanded after AIDS. Furthermore, we clarified the connection between lawyers and the inheritance of litigation tactics through modern lawsuits from the environmental pollution to the SMON, and to the subsequent DISs. The results of these studies were able to come to fruition in the form of "What is Yakugai? A New Sociology of Yakugai" (Minerva Shobo).

研究分野：医療社会学・社会運動論

キーワード：薬害　Biological Citizenship　薬害アーカイブ

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

１．研究開始当初の背景

なぜ「薬害」概念は海外に存在しないのか。本調査研究は、2001 年から継続している薬害エイズを中心とする調査研究成果から仮説として、①「被害」が構築される側面の相違、②公害問題の文脈の存在、③薬害概念自体の変質、を提示している。薬害を日本固有の事象たらしめているこれらそれぞれの論点について、①健康被害が医学的・法的・社会的に構築されるプロセスについての Biological Citizenship（生物学的市民）の観点からの理論的検討、②薬害スモンに代表される過去の薬害問題と公害問題との訴訟戦術にみる連続性の検討、③薬害 HIV 以降の薬害被害に関する国内外の聞き取り調査の継続、を社会学者および被害当事者や医学・薬学・看護分野の研究者からなる学際的な調査研究体制にて取り組むこととした。

いわゆる薬害問題とは、広義には多くの患者が医薬品により享受すべき有効性（主効果）よりも副作用が上回った場合の問題状況を意味することが多く、行政や企業の過失や不作為による健康被害として理解されることが医学・薬学分野では通例である。しかし、このような薬害定義では、これまでに本調査研究が中心的に分析対象としてきた薬害エイズのような血液製剤の「汚染」は含まれない。さらに保健医療社会学領域では、薬害が健康被害をもたらすのみならず、周囲からの偏見や差別、経済的困窮といった生活全般にわたる「被害」を包含したものとして捉えてきた経緯がある。ここに健康被害に加えた生活全般にわたる被害への着目、という視座が得られたことになる。

他方で、社会運動論の観点からは、医薬品により生じた諸問題を運命や罰と捉えて泣き寝入りするのではなく不公正と定義づけ、「被害者」として社会的な承認を得るための集合的営みとして薬害を定義することができる。ここには、救済の必要性と緊急性を社会に訴え、正統性という資源を獲得する場として法廷を位置づける「現代型訴訟」の特徴が表れている。社会問題として先行する公害問題の解決は現代型訴訟のプロセスをたどっている。つまり薬害問題とは、個人の健康被害の次元を超えた集合的な問題開示であり、社会的な相互行為を経た上で立ち現れるきわめて運動的・政治的な概念であることがわかる。

さらに 2019 年度までの国内外調査から、薬害概念は海外には存在しないことが管見の限りで明らかになっている。その理由として、異なるイシューの被害者同士を結びつけるはたらきが日本にはあったことが考えられる。薬害エイズ訴訟の和解（1996 年）を経た 1999 年に「全国薬害被害者団体連絡協議会（薬被連）」が発足し、現在、薬害エイズ、薬害肝炎など計 12 の被害者団体（10 問題）が加盟している。これらには医薬品による健康被害という共通項はあるが、時代背景や原因となる医薬品が異なり、それぞれのイシューを「薬害問題」と一括りで論じることは無理筋であるように感じられる。しかし、異なるイシューでも薬害根絶という共通の目的により時空を超えて薬害カテゴリーの下、連帯できるようになったといえるのではないか。

２．研究の目的

日本固有の薬害概念の理解のためには、上述した①薬害被害を証するポリティクス（保健医療社会学的観点）、②被害者運動の文脈の再定位（社会運動論的観点）、③薬害概念そのものの変容（概念史研究的観点）、をそれぞれ考察の俎上に載せる必要がある。これらについてそれぞれ、以下のような目的のもとで考察することとした。

第一に、薬害問題を把握するためには、個別イシューを超えたより広い社会的過程に薬害を位置づけて考察する必要がある。これには公害問題をはじめとする日本の被害者運動の文脈に加え、薬害教育が薬学・医学分野の教育モデル・コアカリキュラムや、義務教育課程に組み込まれるといった社会的文脈、などが挙げられる。これらについては、ウクライナにおける Biological Citizenship の構築に関する A. Petryna の考察を手がかりに、どのようにして「われわれ意識」を醸成し、被害の補償を求めていくかを明らかにしようとした。

第二に、リモート研究会に大山小夜氏（金城学院大学）を招聘し、多重債務者の救済活動のおける被害の表象に関する事例紹介の検討をおこない（2020 年 10 月 18 日）、薬害問題を広く日本の被害者運動の歴史に一般化し、位置づけることをめざした。同じく、研究会合宿では、公害問題や薬害スモン調査をおこなった故・飯島伸子の足跡をたどった友澤悠季氏（長崎大学）にリモート報告をいただき、飯島伸子の思索を紹介いただくことで、公害（問題）研究と薬害（問題）研究との接点を確認している（2022 年 2 月 19 日）。

第三に、薬被連の設立経緯を追尾することで、いかに薬害概念が健康被害者たちに解釈され、受容され、さらには薬害概念が変質していったのかを追うこととした。鼎談のようなかたちも含めて、結成当時の問題意識を薬被連メンバーからインタビューで引き出すことをめざした。

これらの目的を達成するためには、研究代表者が専門とする医療社会学や社会運動論のみならず、科学社会学や環境社会学、さらには薬学や看護学といった社会学領域を超えた薬害概念の検討が必要不可欠であると考えられた。本調査研究の場合、前身の「輸入血液製剤による HIV 感染問題調査研究委員会」（養老研：2001 年 9 月～2009 年 3 月）から継続する調査データの蓄積や、研究協力者としての被害当事者の研究会参加や、医師などによる側面支援があり、調査研究の継続に支障は無く、調査研究の創造性を高めている。さらに、研究代表者らが分担研究者とな

っている厚生労働省科学研究費補助金（厚労科研）による「薬害資料データ・アーカイブズの基盤構築･活用に関する研究」と連動させ、薬害を含めた歴史資料展示の方法論について検討した。具体的には、ハンセン病の重監房資料館および栗生楽泉園（群馬県、2022 年 8 月 10 日）、長崎大学医学ミュージアム原爆医学資料展示室、原爆資料館、国立長崎原爆死没者追悼平和祈念館（長崎県、2023 年 2 月 20 日）を見学した。このような被害者や被害者運動の歴史とを対照させることにより、薬害問題の特質を浮かび上がらせ、被害の歴史をいかに後世に伝承していくかという課題を公害問題などと同種同列の問題として捉える視座を検討する。

最終的には、研究成果を初学者向けのテキスト『薬害とはなにか――新しい薬害の社会学』としてまとめ、成果を世に問うこととした。「薬害の社会学」は薬害エイズが問題として浮上する前に著された宝月誠編『薬害の社会学――薬と人間のアイロニー』（1986 年、世界思想社）があり、薬害を主題とした書籍としてはそれ以来であり、かつ当事者を含めた学際的な執筆陣により編まれる本書は、医学・薬学教育や初学者など幅広い読者層に訴求するものと考えた。

３．研究の方法

本調査研究は、2001 年から蓄積している薬害に関するインタビューデータや文書資料に加えて、薬被連メンバーへのリモートインタビューをおこない、薬害概念の変質について検討した。さらに、上述したゲストスピーカーからの理論的示唆、厚労科研事業との連携から、日本の被害者運動史に薬害問題の位置づけをはかり、そのつながりについて検討した。

薬害が問題化され制度化されるプロセスを分析するに際しては、近年、医療社会学分野などで言及されている Biological Citizenship 概念に着目し、薬害概念の海外発信を念頭に検討をおこなった。A. Petryna によれば Biological Citizenship とは「生物学的損傷を認知し補償するための医学的、科学的、法的基準に基づいて遂行される社会福祉の一形態に対する巨大な要求であり、またそれに対する選別的なアクセス」（Petryna, A., 2003, *Life Exposed: Biological Citizens after Chernobyl*, Princeton University Press）である。チェルノブイリ原発事故後に独立したウクライナ共和国は、近隣住民の放射能被爆に関する情報開示を積極的におこなうことで、他国からの支援を取り付け、ソ連邦離脱後の新しいナショナル・アイデンティティに住民を結びつけようとした。このような施策は、近隣住民に健康被害の補償を提示することで、体内線量を測定する被災者であることを証明する行為に駆り立てる、いわば規律権力を近隣住民にはたらかせた。つまり、近隣住民たちは本来健康でありたいところを、不健康（＝被災者）であろうとしたことになる。

このように Petryna は、Biological Citizenship の展開に国の施策に促された２つのプロセスの相克、すなわち自身を被害者と認識し、被害者になるプロセス（＝Becoming Victim）と、被害者であり続け、時に被害者アイデンティティに過度にとらわれてしまうプロセス（＝Being Victim）との相克を見出しており、これとまさに同じ構図が薬害の制度化にも見て取れる。かつては薬害という呼称を否定していた厚生労働省は、今では薬害教育を推進し、制度化していく側に立っている。薬被連の存在もまた、制度化に寄与している。その一方、薬害概念が包含する多様なイシューや揺らぎは希釈され、被害者は被害者役割から「降りる」ことが許されなくなった。なぜなら、薬害の制度化にあたっては概念の一貫性や、被害を訴え続ける被害者が必要とされるからである。Biological Citizenship 概念により、薬害をめぐる前述の２つのプロセスの相克や、それと薬害をめぐる政策との関係を浮き彫りにできると考えた。

加えて、『薬害とはなにか』の編集に関しては、夏・春と年２回のハイブリッド形式の研究会合宿や（拡大）編集者会議で原稿の綿密な検討や編集作業をおこない、研究助成期間中の発行を目指した。

４．研究成果

コロナ禍のために国際学会などでの研究成果の報告が当初案通りにおこなえず、コロナ禍、およびワクチンをめぐる問題をも踏まえた内容にする必要性から『薬害とはなにか』の編集作業にも遅れが生じた。その中で、次のような調査研究による成果を挙げた。

第一に、薬被連へのインタビュー調査から、いかに個々の健康被害が薬害概念に結びつけられていくことで、薬害概念が普及し、拡張していったかが明らかとなった。すなわち、サリドマイド薬害や薬害スモンを嚆矢とする日本の薬害問題は、薬害エイズを機に概念の普及が進んだ他、一見して薬害問題と同一視することが難しい陣痛促進剤薬害や MMR ワクチン薬害などの問題を戦略的に包含していったことを示した。

第二に、上記に関連して、公害問題から薬害スモンへ、さらに後続の薬害問題へと弁護士のつながりや現代型訴訟による訴訟戦術の継承がおこなわれることで、薬害訴訟運動のテンプレートが確立していく経緯を追跡できた。そこには、複数の薬害問題を手がける弁護士の役割が大きいことが明らかになり、今後のさらなる調査課題となった。

第三に、厚労科研との連携により、薬害資料の散逸や死蔵、さらには薬害被害者の高齢化などを受け､薬害資料展示が喫緊の課題になり､効果的な展示のあり方を検討する必要性が示された。厚労科研は事業ベースであることから、本調査研究チームが研究ベースで展示に資する薬害資料のあり方や伝承方法について考察することが不可欠であることが明らかとなった。

本調査研究チーム主体では、おもに以下のような成果発信をおこなった。まず、第 48 回日本保健医療社会学会大会でのラウンドテーブルディスカッション「薬害問題を思索する知性を社会で育む」（松山大学、2022 年 5 月 29 日）を企画し、多くの保健医療社会学者たちと議論を交

わすことができた。さらに、本調査研究最大の目標であった『薬害とはなにか――新しい薬害の社会学』（ミネルヴァ書房）を 2 月に上梓し、研究協力者である特定非営利活動法人ネットワーク医療と人権の主催で出版記念シンポジウムを開催した（グランフロント大阪、2023 年 2 月 23 日）。今後は、書評とそのリプライのかたちで読者と議論を重ね、次回作につなげていく。

上記の成果公開の一方で、申請時に企図していた Biological Citizenship 研究の渉猟や、海外での調査研究および成果発信については、今後のさらなる課題として次期科研プロジェクトに引き継がれることとなった。

○『薬害とはなにか』の構成

		題　目	執　筆
はじめに			佐藤 哲彦（関西学院大学）
第１章	第１部	薬害の定義と薬害概念	佐藤 哲彦
第２章		薬害問題の構築プロセス	本郷 正武（桃山学院大学）
第３章		薬害被害と再発防止策	花井 十伍（ネットワーク医療と人権）
第４章		医療の不確実性と薬害	中川 輝彦（熊本大学）
コラム 01		繰り返された薬害――薬害エイズの衝撃	佐藤 嗣道（東京理科大学）
コラム 02		生まれ来る血友病患者たちへ	森戸 克則（むさしの会）
第５章	第２部	サリドマイド薬害――被害は障害者に対する排除と差別から始まっている	蘭 由岐子（追手門学院大学）
第６章		薬害スモン――「病んでいる社会」の発見	田代 志門（東北大学）
コラム 03		ワクチンと薬害	佐藤 哲彦
コラム 04		売血と献血――血液提供をめぐって	吉武 由彩（熊本大学）
第７章		薬害エイズ（１）――未知の病いの当事者となること	松原 千恵（奈良女子大学）
第８章		薬害エイズ（２）――薬害と医師の経験	蘭 由岐子
コラム 05		陣痛促進剤と医療現場――安全で安心な出産をするために	藤田 景子（静岡県立大学）
第９章		薬害肝炎――感染と被害とは必ずしも同義ではない	種田 博之（産業医科大学）
コラム 06		イレッサ薬害――国が薬害と認めない薬害	花井 十伍
コラム 07		「子宮頸がんワクチン」接種後の有害事象ないし健康被害	種田 博之
第 10 章	第３部	薬害根絶への思いと薬害教育	中塚 朋子（就実大学）
コラム 08		日英の比較に見る薬剤師養成の歴史と医療安全を支える薬剤師への期待	松岡 一郎（松山大学）
第 11 章		薬害エイズ事件のメディア表象の分析	山田 富秋（松山大学）
第 12 章		制度化からみる薬害と食品公害	宇田 和子（明治大学）
コラム 09		薬害アーカイブズ――記憶を伝え、教訓を活かす	藤吉 圭二（追手門学院大学）
コラム 10		薬害調査研究を振り返って	若生 治友（ネットワーク医療と人権）
おわりに			本郷 正武
資料：薬害年表			矢﨑 千華（関東学院大学）
資料：ブックガイド			矢﨑 千華
文献リスト			矢﨑 千華
報告書リスト			本郷 正武

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計9件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　9件）

１．著者名 Matsuoka Ichiro	４．巻 20(2)
２．論文標題 EDITORIAL: Impact of COVID-19 pandemic on higher education in Japan: Transition to online education and challenges in experiential pharmacy practice	５．発行年 2021年
３．雑誌名 Pharmacy Education	６．最初と最後の頁 91～94
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.46542/pe.2020.202.9194	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 吉武 由彩	４．巻 17
２．論文標題 なぜ献血を重ねるのか	５．発行年 2020年
３．雑誌名 福祉社会学研究	６．最初と最後の頁 159～180
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.11466/jws.17.0_159	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 YOSHITAKE Yui	４．巻 71
２．論文標題 Repeat Blood Donation and the Anticipation of Reciprocity	５．発行年 2020年
３．雑誌名 Japanese Sociological Review	６．最初と最後の頁 429～446
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.4057/jsr.71.429	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤 哲彦	４．巻 31
２．論文標題 二つの保健医療社会学をめぐって：学際ジャンルをメンテナンスする多様性と継続性	５．発行年 2020年
３．雑誌名 保健医療社会学論集	６．最初と最後の頁 32～39
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.18918/jshms.31.1_32	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 種田 博之	4．巻 1
2．論文標題 医学教育に資する社会学とは:薬害エイズを事例とした医療の不確実性の教育	5．発行年 2021年
3．雑誌名 社会学は医学専門教育カリキュラム改革にいかにコミットできるのか：社会学教育委員会（2019～2021年）報告書	6．最初と最後の頁 55～61
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 種田 博之	4．巻 33(2)
2．論文標題 血友病HIV感染者の抱える問題:「病い」にまつわる生きづらさと苦心惨憺	5．発行年 2023年
3．雑誌名 保健医療社会学論集	6．最初と最後の頁 26～34
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 種田 博之	4．巻 134
2．論文標題 Victim as Institution : A Case Study of the AIDS Disaster Through HIV-Contaminated Blood Products	5．発行年 2023年
3．雑誌名 立命館大学人文科学研究所紀要	6．最初と最後の頁 275～299
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.34382/00018078	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 中川 輝彦	4．巻 4
2．論文標題 EBMの誕生 ：「医療の確率化」のレトリック	5．発行年 2023年
3．雑誌名 人文科学論叢	6．最初と最後の頁 83～102
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 佐藤 嗣道	４．巻 5(14)
２．論文標題 医薬品等行政評価・監視における薬剤疫学の役割	５．発行年 2022年
３．雑誌名 Precision Medicine	６．最初と最後の頁 1271～1274
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

〔学会発表〕　計9件（うち招待講演　3件／うち国際学会　0件）

１．発表者名 本郷 正武
２．発表標題 薬害における「加害」の射程：保健医療社会学者・飯島伸子の経験から
３．学会等名 日本社会学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 松岡 一郎
２．発表標題 臨床事例における倫理課題の解決を導く２・３年次共通専門科目「医療倫理１・２」のオンライン実施
３．学会等名 日本薬学会
４．発表年 2021年

１．発表者名 佐藤 哲彦
２．発表標題 ワクチン時代においてワクチン禍について考えるということ
３．学会等名 日本保健医療社会学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 中塚 朋子
２．発表標題 薬害根絶の思いと薬害教育:薬害の再発防止を目指した社会の連帯
３．学会等名 日本保健医療社会学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 種田 博之
２．発表標題 医学部における薬害教育の難しさ:いわゆる「正史」と社会学的発見とのずれ
３．学会等名 日本保健医療社会学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 種田 博之
２．発表標題 血友病HIV感染者の抱える問題:「病い」にまつわる生きづらさと苦心惨憺
３．学会等名 日本保健医療社会学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 中川 輝彦
２．発表標題 EBMの誕生:専門家システムとしての医療の変容
３．学会等名 日本保健医療社会学会
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐藤 嗣道
２．発表標題 サリドマイドおよび類似薬のリスク管理システムの概要と課題
３．学会等名 日本医療安全学会（招待講演）
４．発表年 2022年

１．発表者名 佐藤 嗣道
２．発表標題 国内の公的な医薬品情報の現状とそのあり方を考える
３．学会等名 日本薬学会（招待講演）
４．発表年 2023年

〔図書〕　計7件

１．著者名 松島 哲久、宮島 光志、（本郷 正武）	４．発行年 2021年
２．出版社 丸善出版	５．総ページ数 188
３．書名 新版 薬学生のための医療倫理【コアカリ対応】	

１．著者名 三隅 一人、高野 和良、（吉武 由彩）	４．発行年 2020年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 288
３．書名 ジレンマの社会学	

1．著者名 松本 俊彦、（佐藤 哲彦）	4．発行年 2022年
2．出版社 金剛出版	5．総ページ数 220
3．書名 アディクションの地平線	

1．著者名 景山 茂、久保田 潔、（佐藤 嗣道）	4．発行年 2021年
2．出版社 ライフサイエンス出版	5．総ページ数 448
3．書名 薬剤疫学の基礎と実践（改訂第3版）	

1．著者名 日本医史学会、（本郷 正武）	4．発行年 2022年
2．出版社 丸善出版	5．総ページ数 836
3．書名 医学史事典	

1．著者名 川西 正祐、小野 秀樹、賀川 義之、（佐藤 嗣道）	4．発行年 2023年
2．出版社 南山堂	5．総ページ数 624
3．書名 図解 薬害・副作用学	

１．著者名 本郷 正武、佐藤 哲彦、（蘭 由岐子、宇田 和子、佐藤 嗣道、田代 志門、種田 博之、中川 輝彦、中塚 朋子、花井 十伍、藤田 景子、藤吉 圭二、松岡 一郎、松原 千恵、森戸 克則、矢﨑 千華、山田 富秋、吉武 由彩、若生 治友）	４．発行年 2023年
２．出版社 ミネルヴァ書房	５．総ページ数 300
３．書名 薬害とはなにか：新しい薬害の社会学	

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	蘭　由岐子 (ARARAGI Yukiko) (50268827)	追手門学院大学・社会学部・教授 (34415)	
研究分担者	宇田　和子 (UDA Kazuko) (90733551)	高崎経済大学・地域政策学部・准教授 (22301)	
研究分担者	佐藤　哲彦 (SATO Akihiko) (20295116)	関西学院大学・社会学部・教授 (34504)	
研究分担者	佐藤　嗣道 (SATO Tsugumichi) (50305950)	東京理科大学・薬学部薬学科・准教授 (32660)	
研究分担者	田代　志門 (TASHIRO Shimon) (50548550)	東北大学・文学研究科・准教授 (11301)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	種田　博之 (TANEDA Hiroyuki) (80330976)	産業医科大学・医学部・講師 (37116)	
研究分担者	中川　輝彦 (NAKAGAWA Teruhiko) (10440885)	熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・教授 (17401)	
研究分担者	中塚　朋子 (NAKATSUKA Tomoko) (50457131)	就実大学・人文科学部・准教授 (35307)	
研究分担者	藤田　景子 (FUJITA Keiko) (60587418)	静岡県立大学・看護学部・教授 (23803)	
研究分担者	藤吉　圭二 (FUJIYOSHI Keiji) (70309532)	追手門学院大学・社会学部・教授 (34415)	
研究分担者	松岡　一郎 (MATSUOKA Ichiro) (40157269)	松山大学・薬学部・客員教員 (36301)	
研究分担者	松原　千恵 (MATSUBARA Chie) (80814368)	奈良女子大学・国際交流センター・特任助教 (14602)	
研究分担者	矢崎　千華（矢崎千華） (YAZAKI Chika) (30868021)	関東学院大学・社会学部・講師 (32704)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	山田　富秋 (YAMADA Tomiaki) (30166722)	松山大学・人文学部・教授 (36301)	
研究分担者	吉武　由彩 (YOSHITAKE Yui) (70758276)	熊本大学・大学院人文社会科学研究部（文）・准教授 (17401)	

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関